860
44

小朝拝 二 生食沙汰 三 宇治川
四 河原合戦 五 木曽最後 六 樋口被斬
七 六ヶ度合戦 九 三草合戦 八 仝勢揃
十 老馬 十一 一二之掛 十二 二度ノ懸
十三 坂落 十四 盛俊最後 十五 忠度最後
十六 重衡生捕 十七 敦盛最後 十八 濱軍
十九 落足 廿 小宰相

860-44

帝國圖書館藏

小朝拝　九

口説

（中上下）寿永二年（上上中）正月（中下）一日（上上上中）院の御所は大膳大夫（中上）

（中下）成忠（中中下）か宿所六条（上中）西洞院（中上中下）なりけれは

（此上）御（上下）所の躰い（中上中下）然るへからすとてし礼義とゝめられて（中上中下）

（中下）拝らいもなし院の拝（中下）礼（ライ）（下ゲ入）（一、一ア、、）なかりけれは内（へ、アー）

裏の小朝拝もおこなはれす平家は讃岐国（中音一ル）

ガラス使用

八島の磯に送りむかへて年のはじめなれども。
元日元三の儀式事よろしからず。主上
渡らせ給へども節会もおこなはれず。四方
拝もなし。はらかもそうせず。吉野の国栖も
参らず。世乱れたりしかども都にては流石
かくはなかりし物をとぞ各のたまひあはれける

三重
青陽の春も来り、浦ふく風もやはらかに日影も長
閑になりゆけども、平家の人々はいつも氷
にとぢこめられたる心地して、かんくてうにことならず。
東岸西岸の柳遅速をまじへ、南枝北
枝の梅かいらくすでにことにして、花のあした
月の夜、詩歌管絃鞠小弓扇合絵合

一フ　四　フ
草ばらし。虫ばくし。[illegible]じ[illegible]ならは
ざらぬ世を[illegible]はいつしか[illegible]けく[illegible]さ[illegible]
物[illegible]そばにけだしけ

生食

口説

同しき十一日木曽のさま頭の義仲院参
して平家追討の為院宣をかうふつて
西国へはつかうすへきよしをそうもんす
同しき十三日既に門出ときこえしところ
かまくらのさきの兵衛のすけよりとも
木曽からうせきしつめんとてのりより
よしつねを大将として数万騎のぐん
びやうをさしのぼせられけるがすでにみの
美濃の国伊勢の国につくときこえしかば
木曽大きにおどろき宇治勢田の

ガラス使用

そうしゑうしんで果あらはし給ひき。
おのれ將かしてだりしけれせんがふて
やまとハくはらく瀬田の橋くてさでやの御
[illegible]平八郎將ふんでつかはし宮路
そうくさ仁科たちかし白河の院。

あ平家將まんでつかはしけれバいまだ何事
あだれさしの三郎ぜんしやうしの
三印宰將ふんてむかはれけれ親者給ふ者
よりせかんのかたふて此も將軍まゝ
かまれわかんぞくしのつまりがたそての

ガラス使用

大織冠中々九郎がかんぞうし第の孫
むかし孫氏大君二条葉人参議
あ百家務らぞはへし其比淡海公
ホさ中臣藤原鎌足聞鳥けり
生臨へども摂政源人京事頼き正節

あれども是自然の事れうしん時刻
動物の如くして雲角さてりける若
られ若てでらん推東まる鹿[illegible]社
たゞ舟ぎんじんし京[illegible]の淡海経人々
西四卯京深御いと[illegible]れたりる
淡会まかへ八是らえ進りける所詣[illegible]

ガラス使用

此月もさればこそ君の御事思ひ出て
琴を弾き給はぬ事はよもあらし
つて御前に召されて仲国笛を
吹きし其琴の音は何くなりとも聞知らん
ずるものを嵯峨の在家幾程か
へきせんに尋ねなば聞き出さで有べき

みえけりと覚えて候へ定て尋候はん
と申せば御書あそばして給りけり
あくがれて御前をまかり出で寮の御馬
し寮の小家の衰へ名月に鞭
と詠ぜし嵯峨のあたりの秋の頃
是柄を経て行まゝに控へ聞ければ

各思ひ〳〵に上り程に駿河の国浮島が原にて
梶原源太景季高き所に打上りしばしひかへて
多くの馬共を見ゐたれば思ひ〳〵の鞍置き色々の
鞦かけ或はのり口にひかせ或はもろ口にひか
せ幾千万と云数を知らず引通し〳〵しける
中にも景季が給つる磨
墨に増る馬こそなかりけれと嬉しく思ひて見る
所に生唼と覚しき馬こそ出来たれ
金覆輪の鞍置せ小総の鞦かけ白轡
番白沫かませ舎人あまた付たり
けれども猶引もためず躍らせて出来
たり梶原打寄て夫は誰が御

ガラス使用

可能て続く殿の河原毛なる馬に乗り一乙
卯原の四郎原の河原毛に乗りて川を渡る
楯東の安のこの其の一間殿に付きける
京都よりも続くも此の上からぬ
数の程の者なりしが度々の上り毛
敵の御前に天王とも申す今井種白

楯根井と続いて我劣らじと酒
生へ向ひて平家の勢に軍して我も我もと
ばかり此の御方にて一とも去る者なし
誠に其の中にこもりて敵に追はれ候ふ
汝で義仲へ申すは二人我々と御座
討ち揃ひで侍ども二ん秘語て落ち伸びる

彼是ゟ四まかりぞのり給ふのつて歩せ
出でまかりぞ推参推参一下や經く廻ふ
於ける中や落とゝまる人詞を掛
けれ共浪にも助に生者必滅
経てぞ上も給ふかとおもはれば会者必衰
此にも同じ所を申せともちて物をと

経ども其は左に維今度此御ことに羅
それより維ぞ維盛同じく定て捨みれ
いんぜん新て河尻に落入りまでいそぎし生
噂を申もとハ扨しかれ共御返事の中
さらば給ふたる御殿をも捨て捕る
縁かなしき中をつハでしもにおもはれ候日に

如何なる御心細さもいかに有とそ[illegible]
て[illegible]目立れらて[illegible]命[illegible]心合やゝて
さても御秘蔵の[illegible]海をと[illegible]して
上りさまに[illegible]のよ、[illegible]乗敵と云れて[illegible]
東[illegible]国に[illegible]て、[illegible]ひ命は[illegible]も
道へかゝりつ[illegible]物をとて、[illegible]前てそ深

ねがはくは

宇治川　九之巻

（口下キ）佐々木の四郎（中下）給（上上中下）ハりける御馬ハ（上上）黒

（下）くりげなる（中下）馬の（上下）いかにもふとう（下中下上上中）たくま

（下）しきが（上下）馬をも（中下）人をも（上上）あたりを（下）はらつて

（中上中下）喰ければ（上上下）生喰と名付られ（上中）たり八寸の馬（上下）とぞ

（上中）きこへし（上上中下）梶原が（上中）給ハつたりける摺墨も（上下）きハ

めて（下中下上上中下）ふとうたくましきが誠に（下中）黒かりけれバ

（中上下）摺墨とつけら（上中）れたり何（下中上下）の（衍文）れもおとらぬ（中下）名馬なる

ガラス使用

おしゞ去行る京中の大路追すかしめぐ。

二万余騎でせめのぼる追手の大将軍

はかまのおんざうしのりよりあひともなふ

人々武田の太郎加賀見の次郎一條の次郎

板垣の三郎いなげの三郎はんがいの

四郎熊谷の次郎いのまた小平六をさきと

して都合其勢三万五千余騎

近江国のぢ篠原に陣をとりける

からめての大将軍は九郎おんざうし義経

同じう伴ふ人々安田の三郎大内の

太郎畠山の庄司次郎梶原源太

佐々木四郎かすやの藤太渋谷右馬の允

平氏の武者所をさして都合其勢
三万五千余騎伊賀伊勢を経て宇治
橋のつめにぞおしよする宇治も勢田も
はしをひいて水のそこにはらんぐいうって大
綱はりさかもぎつないで流しかけたり
比は睦月廿日あまりの事なれば比良の高
根
志賀の山むかしながらの雪もきえ谷々の
こほりうちとけて水はおりふし増りけり
しら浪おびたゞしうみなぎり落せまくら
おほきに滝なってさかまく水もはやかりけり
夜はすでにほのぼのとあけゆけど河ぎりふかく立こめて
馬の毛も鎧の毛もさだかならず

九郎おんざうし義經川のはたにすゝみ出
て水の面をみわたして人々の心を
みんとや思はれけん淀いもあらいへやまはる
べきみの日河へまはるべき水の落足
をや待べきとの給へば武
蔵の国の住人畠山の庄司次郎重忠。
生年廿一に成けるがすゝみ出て申けるは
此川の御沙汰ハ鎌倉にてもよく〳〵候ひ
しし
しぞかししろしめさぬ海川が
俄に出来ても候はゞこそ近江の湖の末
なれば待とも〳〵水干まじ橋をば又
誰かわたいてまいらすべき治承の合戦

ガラス使用

足利の又太郎忠綱生年十七歳と名乗て
渡しけるぞ鬼神とて畠山庄司重忠
先せずんば仕らんぞとてだんのこうとも〇として
大将軍ぞしく〳〵とくつだんどのいでたちかゝる
かゝる所に平等院の艮橘の小島が崎
より武者二騎引かけ〳〵出来たり。

騎ハ梶原源太景季一騎ハ佐々木四郎
高綱也人目にハ何とも見えざりけれ共
先に心を遣りけれハ梶原ハ佐々木に一段計ぞ
進んだる佐々木四郎梶原殿此川ハ西
國一の大河ぞや腹帯の延て見へさうぞしめ給へ
といはれて梶原さもあるらんとや思ひけん手綱を

るのゆかみに捨て左右の鐙ふみすかし
へと解てぞしめたりける其間に佐々木は
つゝと馳ぬけて河へさつとぞ打入る梶原た
ばかられぬとや思けん頓て続て打入たり
原いかに佐々木殿高名せうとて不覚した
まふな水の底には大綱あるらん心得
給へと云ければ佐々木実もとや思ひけん太刀を
抜て馬の足にかゝりける大綱共をふつ〳〵と
打切〳〵宇治川はやしといへどもいけずきと云
世一の馬にはのつたりけり一文字に颯と渡
いて向の岸に打上る梶原が乗たりける磨墨は
磨墨は川中より篦撓形に押なされ

てんじやうの下より打あがり其後佐ゝ木は鐙
ふんばり立あがり大音声を揚て宇多の
天皇より九代の後胤近江の国の住人佐ゝ木
三郎秀義が四男佐ゝ木四郎高綱宇
治川の先陣ぞや平家の御方に我と
思はん人ゝは寄合へや見参せんとて
めいて蒐其後畠山五百余騎打入て渡す向の
岸より山田の次郎が放つ矢に畠山馬のひたいを
のぶかに射させてよはれば川中よりゆんづえをついて
おりたつたりいはなみ甲の手さきへさつとおしあげけ
れども畠山是を事ともせず水の底をくゞつ
て向いの岸まで[illegible]

ガラス使用

河を渡り渉して　むづとひかへたれば　誰そと問へば
しげちかと答ふ　いかに大串か　さん候　大串は
畠山が烏帽子子にてぞ候ひける
あまりに水がはやうて　馬はおし流され
ぬ　力及ばで漸く是まで付きまゐらせて
候と申しければ　畠山いつもわ殿ばらは

重忠にして助けられんずれとて　大串をつかんで。
岸の上へぞなげ上げたる。なげ上げられてたゞなほる。
太刀を抜き額にあてゝ　大音声を揚げて　武
蔵の国の住人　大串次郎重親　宇治川の
かちだちの先陣ぞやとぞ名のつたる。敵も
味方も是を聞いて一度に笑ひける。[illegible]

畠山、乗替にのつて、うちあがる。ここに魚
綾のひたゝれに、ひをどしの鎧着て、れんせんあしげなる馬に
金覆輪の鞍おいて、のつたる武者
一騎、まつさきにすゝんだるを、畠山、声をかけて
何者ぞ、名のれ〳〵といひければ、木曾殿の家
の子に、長瀬の判官代、重綱と名のる。
畠山、いでさらばけふの軍神祝はんとて、押並べ、
むずと組んで、ひきおこし、我乗つたる鞍の前
輪におしつけて、ちつともはたらかさず、首ねぢ
切つて、本田の次郎が鞍のとつつけにつけ
させけれ。是をはじめて、宇治橋かためたる兵
ども、しばしさゝへて戦ひ合せしかども、

ガラス使用

いへども東堂の石階[illegible]いて[illegible]れども力なりけり
本[illegible]山[illegible]んどさうてぞ落つる[illegible]田とじい
かげの三宮おばかりがそうらいまてたま[illegible]
のこご[illegible]渡そて[illegible]しにれ

河原合戦

口説

宇治勢田破れしかば大将軍九郎御曹司義経飛脚を以て鎌倉殿へ合戦の次第を委ウ記て申されけり鎌倉殿先御使に佐々木は如何にと御尋ねば宇治川の真先候と申す。扨日記披イて御覧ずれば宇治川の先陣佐々木四郎高綱二陣梶原源太景季とこそ書れけれ

宇治勢田破れぬと聞えしかば木曽は最後の御暇申さんとて院の御所六条殿へ馳参る。木曽門迄参りたれども左右無く参り得ず前も無くして取て返し六条高倉なる所に。見初メたりける女房の有ければそれへ打寄る。

ガラス使用

最後の名残惜しうて頓に出でも遣らざりけり。
爰に今参りしける越後ノ中太家光と云者
有り御敵既に河原迄責入て候に何や
斯様に打解け渡らせ給ひて候ぞ。只
今は犬死せさせ給ひなんずと申けれども。
猶出でもやらざりければ然候はゞ先ッ
前立進らせて死出の山にて待進らせんや
仕りなんとて腹掻切て死にける木曾殿是を
我を進むる自害にこそとて頓て打立給ふ。
爰に上野の国の住人那波太郎廣純其勢百騎
計りにて六条河原に打出て見れば。
東國の武士と覚しくて先ッ三十騎計りにて出来り。

ガラス使用

其中より武者二騎先に進んだり。一騎は塩
屋の五郎惟広、一騎は勅使河原の五三郎有直也。
塩屋が申けるは、後陣の勢をや待べき。又勅使
河原が申けるは、一陣破れぬれば残党全から
ず。只蒐よとて喚イて蒐ツ。木曽は今日を最
後と戦へバ、東国の大勢は我中に取篭て吾
討捕らんとぞ進ける。大将軍九郎御曹司義経、
軍兵共に軍せさせ、我身は院の御所の覚束なきに
守護し奉らんとて、直甲五六騎、院の御所六
条殿へ馳参る。御所には大膳の大夫成忠、御所の東
の築垣の上に登り上ッて、わなゝく見渡せば、武士五六
騎除甲に戦ひ成て、春風に射向の袖を靡

ガラス使用

せ白旗靡いて指挙て黒烟蹴立て馳参る
成忠余りの浅猿さに木曽が又参って候と申
されバ院中ノ公卿殿上人局の女房達に至る迄
今度ぞ世の失果こそとて手を握り立ぬ願も無りけり
治りす成忠重て奏しけるは今日始て都へ
入る東国の武士と覚へ候笠印の様も皆

替って候と申も果ぬに大将軍九郎御曹司義
経門前まで馳て馬より飛て下り門を敲か
せ大音声を上て鎌倉の前兵衛の佐頼
朝が舎弟九郎義経宇治の手を攻破て
此御所守護の為に馳参じて候開て入させ
給へ奏聞せよと云入られ申されけれバ成忠餘りの

ガラス使用

られけれバ築墻の上より躍り下（ヲル）るとて腰を衝（ツキ）
損じけれども痛さは嬉しさに紛れて
覚へず這々御前へ参りつゝ此由奏聞したり
ければ法皇大に御感あって門を開（アケ）させて
入らるゝ義經其日の装束には赤地の錦の
直垂に紫裾濃の鎧着て鍬形打ったる甲の
緒を縮（シメ）金作りの太刀を帯二十四指（イ）たる截箭（キリフ）
の矢負ひ滋藤の弓持たる弓の本（ト）を紙を廣（サ）一寸
計りに切って左り巻に巻（イ）たりける是ぞ今日（ケフ）
の大将軍の印とぞ見えし法皇中門の櫺子（レンジ）
より叡覧あって勇々しげなる者どもかな皆
名のらせよと仰られければ先ッ大将軍九

郎御曹司義經は安田三郎義定大内の
太郎是義梶原源太佐々木四郎渋谷右馬
允重資(シゲスケ)ハこそ我ゝ名謁ッたる義經身ハして武士ハ
六人鎧ハ色々なりけれ共頬(ツラ)魂(ダマシイ)骨(コツ)柄(ガラ)何レも
劣らざりし成忠仰(セ)蒙ッて義經を中門の大床の
際へ召して合戦の次第を委しく御尋ありけれハ畏て
申されけるハ鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝我
木曽が狼籍をしづめんとて範頼義經先
として都合其勢六万余騎差上せ候が範頼ハ
勢田より参り候へどもいまだ一騎も参り候はず
義經ハ宇治の手を攻落ッて此御所守護の
為に馳参じて候木曽ハ河原を上(ノボ)りに落

所従を軍兵共以て出合候が今は定て
討捕れぬらんと思ひしに事もなげに申されけれ
ば法皇大きに御感あって本宮が文殊堂
なんど召て根籍もなき住ゐをぞ此御所能
守護仕れと仰せられければ畏り承って四方の門を
固て待所に兵共首をそろへて一萬騎

少将成経は本宮に居たるもの也ければ法皇
を申して西国へ落下り平家と一ツに成とて
力者二十人ありつる持参申けれ共御所は
又美濃馳参りたるこそしかも守護しけれ
も閑へしつれバ力及ず河原坂より落行
かやうに数萬騎の敵の勢の中へ懸入て討れ

ガラス使用

さヽノノノノ拾下　、一一、アイ
すゝる事度々に及ぶ葛破り々々通りけり。
中、一ア　ルア　ヤ、　アア　アア
木曾涙を流いて斯るべしとだに知りせば
一声　アノ　ルノ　ノ　ルア　ルア　ル　二声、二
せうじ今井を勢田へ遣らざらまし幼少
チノルア　スク　チ　ルア　一　三ッ一
竹馬の昔より死なば一所で死なんとこそ契り
三ッ二　ルラ三ッノ二　ラル　ノ一ア　四一　一入、一
しか所々で討たれん事こそ悲しけれ今
ニックヒイ　ノヽ　ノ一　ヘノ中　ッヘ　ノノラルノノ
一度今井が行方を聞かばやとて河原を上りに。

ヽノノアノ一ヽ、ノ一ノヽ、ノノ二二
葛るほどに六條河原と三條河原の間にて。
ヽヽヽ、二ノ一、ヽアア二ノ、中
敵襲かゝれば取て返し取て返し木曾
ヽノヽ、ノヽアノノヽ、ノ
わづかなる小勢にて雲霞の如くなる敵の大
ヽ、ノヽ二一一ヽ、ノ
勢を五六度迄追返し鴨川颯と
ヽノヽヽノヽヽヽ一ノヽノ
打渡り粟田口松坂迄懸りけり。去年信濃
ヽノヽノ一ノノ
を出しには五万余騎と聞えしが今日四の

ガラス使用

一 六條河原を出てみれは、主従七騎に成にけり。まして中有の旅の空思ひやられて哀なり

木曽最後　九

口説

木曽は、信濃を立し時、巴款冬（ヤマブキ）とて二人の

女と具せられけり。山吹は労る事のありとて、
都に留りぬ。中にも巴は色白く髪長く、
容顔まことに美麗也。ゐかゞ究竟の荒馬乗りの
悪所落し、馬の上、歩立、弓矢打物取ては
いかなる鬼にも神にも逢とゝいふ、一人当千の
兵也。軍といへば、札好き鎧着せ、強弓大太刀
持せて、一方の大将には向られけり。度々の
高名肩を双ぶる者なし。されば今度も多くの
者共落ち失せ討たれける中にも、七騎が中までも
巴は討たれざりけり。木曽は長坂を経て丹
波路へ赴くとも聞えけり。又竜華越にかゝつて北国
へとも聞えけり。かゝりしかども今井が行衛の覚束

ガラス使用

かくは取て返して勢田の手へぞ落行き
然るに今井の四郎兼平も八百余騎にて
勢田を固めたりけるが五十騎計りに打な
されし旗をば巻せて主の向後の覚束
なさに都へのぼる様なる所に打出の濱
にて木曽殿に行逢奉る中一町計

二
互にそれと見知って主従駒をはやめて寄合
たり木曽殿今井が手を取て宣ひける
義仲六条河原にていかにもなるべかりしかども
汝が向後の覚束なさに多くの敵に紛れかけて是
まで遁れたるなりと宣へば今井の四郎
申けるは御諚誠に忝なう候兼平も勢田にて

討死仕りけり然しかども河原の後のおば
つかなさに多の敵を請へと命てぞと出れし
兼て随ひ申けれ共木曽殿は粟津の方へ
里より義仲が宗徒の郎等て此辺までと
松ゆるんで汝が旗挙げさせよと宣へば巻て
持せたる今井が旗を指上たりければ

京より落る勢ぞ多く又勢田より落る者
ども多し猶ひし三百騎計りて馳集る木曽
殿斜ならず悦びけり此勢あらば最後の軍
一軍す可不随ゐあれなるしぐらうて見ゆるは
誰が手やらん甲斐の一條の次郎殿の御手と
社承て候へ勢いくらと有らん六千余騎

初

聞へ候ハ木曽殿殺すとも猶大勢の中へ罷入ッて好敵に逢ふて討死もせんとこそ。
思ひけんとて進み給ふ。木曽殿其日の装束ハ
赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着て五枚甲の緒締め、厳物作りの太刀を帯き、二十四指たる石打の矢の其日の軍に射て少々

残ったるを頭高に負ひなし、滋籐の弓持って、聞ゆる木曽の鬼葦毛と云ふ馬に金覆輪の鞍置て乗ったりけるが、鐙踏張立上り大音声を上て、日来ハ聞けん物を、木曽の冠者、今ハ見るらん、左馬の頭兼伊豫守、朝日の将軍源の義仲ぞや、甲斐の一條

互とによいかたきぞ義仲討て兵衛の佐に見せよや
とをめいて喚てかく一條の次郎是を聞て只
今名のるは大将軍ぞ餘すな者ども漏すな
若黨討やとて大勢の中に取籠て我討
捕んとぞ進ける木曽三百余騎六千餘騎
が中へ蒐入りたてさまよこさま蜘蛛手十文
字に蒐破て後へ通と出たれば五十騎計りに
成にけり其をも破て行ほどに土肥の次郎実
平二千余騎にてさゝえたり其をも破て
行ほどにあそこにては四五百騎爰にては二三百騎
百四五十騎百騎計りが中を蒐破りく行
程に主従五騎にぞ成にける五騎が内までも

ガラス使用

強吟
巴をめされけれバ木曾殿巴に宣て己ハ
女なれバ是より何方へも疾落行義仲ハ
討死せんと思ふぞ人手にかゝらバ自害
をせんずれバ義仲が最後に女を具したりと
なんど云れん事口惜かるべしと宣へども猶落
も行ざりけるが余りに言れ奉て天晴

好からう敵の出来かし最後の軍一軍して
見せ奉らんとて扣て待処に武
蔵の國の住人御田の八郎師重三十騎計で
出来り巴其中へ懸入て御田の八郎に
押ならべむずと組で引落し我乗ッたる
くらの前輪に押付ちッともはたらかさず頸

掻こうでぞ捨てゝんげる其後馬より飛んで
下り物具ぬぎ捨て東国の方へ落ぞ行
手塚の太郎討死す手塚の別当落にけり木曾殿
今井の四郎主従二騎に成て宣ひけるは
日来は何とも覚えぬ鎧が今日は重う成
たるぞや今井の四郎申けるは御身も疲
させ給はず御馬もよわり候はず何によつて
か一領の御着背長を重うは思召候べき
それは御方に御勢が候はねば
臆病でこそさは思召候へ兼平一人と
ば余の武者千騎と思召せ
しばし矢七ツ八ツ候へば先防き矢仕らせ

候はん。阿れに見え候は、あれはしくらう
でうらんなるこそ粟津の松原と申せ。あの松の
中へ入せ給ひて静に御自害候へとて打て
行程に又新手の武者五十騎計出来り
白兼平は此敵暫く防き進し候はん
君はあの松の中へ入らせ給ひて静に御自

害候へと申されければ木曾殿宣けるは義仲
都にていかにも成べかりつるが
汝と一所でも成らん為にこそ多の敵に
後を見せて是まで逃れたれ。所々で
討れんより一所でこそ討死をもせめとて
馬の鼻を並て蒐んとし給へば今井の

四郎馬より飛て下り主ノ馬ノ轡ニ
取付て申けるは弓矢取は
年来日来いかなる高名候へども最後
不覚しつれば長き瑕にて候也御身
もはやつかれさせ給ひぬ御馬も弱りて候御
方に続く御勢も候はねば敵に押
隔てられ云甲斐なき人の郎等に組
落されて御頸取られさせ給ひなんには日本
日本中に聞と国へ聞え給へる木曽殿を
何某の郎等の討奉りたるなんど申さん
事口惜けれ唯あれ松の中へ入せ給て
静に御自害候へと申ければ木曽殿さらば

ガラス使用

して只一騎粟津の松原へぞ蒐給ふ今
井の四郎取て返し五十騎計りの勢の中へ
蒐入り鐙ふんばり立上り大音声あげて
遠からん人は音にも聞け近くは寄て目にも見給へ

詠

木曽殿の乳母子今井の四郎兼平とて
生年三十三に罷成さる者有りとは鎌倉
殿も知ろし召されつらんぞ兼平
討て見参に入よとて射残たる
八筋の矢を指攻引攻散々に射る死
生は知らず矢庭に敵八騎射落し其
後打物抜て切て廻るに面を合
する者ぞ無き只射取れや射取れとて差攻引攻

散々に射れども鎧よければ裏かゝず間を

射ねば手も負はず　走三重　木曾殿は一騎粟

津の松原へ駆け給ふが正月廿一日入相

計の事なれば薄氷は張つたりけり深田

ありとも知らずして馬をざつと打入れたれば

馬の頭も見えざりけり泥障ども泥障ども

打てども打てども働かず今井が行方の

覚束なさに振仰ぎ給へる内甲を相模の住

人三浦の石田次郎為久追懸てよく引て

成ければ眞甲射られ痛手なれば眞甲

を馬の頭に當て

押當て俯し給へる處に石田が郎等二人落合て

ガラス使用

木曽殿の御頸をばつゐに取てげり
扨て首をば太刀の鋒に貫き高く差上て
大音声をあげて此日ごろ日本国に鬼神と聞えし
木曽殿をば相模の国の住人三浦の
石田の次郎為久が討奉ったるぞやと名謁
ければ今井四郎軍しけるが
聞て今は誰をかばはんとて軍をばすべき
是見給へ東国の殿原日本一の剛の者の自害
する手本とて太刀の鋒を口に含み馬より
倒に飛落て貫かってぞ失にける
粟津の軍は無りけれ

樋口被斬

口ドキ
今井か兄の樋口の次郎兼光ハ十郎蔵人討んとて其勢五百余騎にて河内国長野の城へ越へたりけるか其にてハ討漏しぬ紀伊国名草に在りと聞て頓て続いて越へけるか都にハ軍有りと聞て馳て

返して上る程に淀の大渡りの橋にて今
井が下人に行逢たり是ハ尓ハ何の地へと
てわたらせ給ひ候ふやらん都にハ軍
出来て君ハ討たれさせ給ひ候ぬ今井殿も
御自害候と申志けれハ樋口の次郎涙をはら
〳〵と流いて是を各聞給へ君に御志思ひまゐ
らせん人〳〵ハ是より何地へも疾く落行き。
首を剃り乞食頭陀の行をもして御菩
提を弔ひまゐらせ給へかし兼光ハ都へ
上り討死して冥途にても君の御見参
に入り今井をも今一度見んと思ふ為也
とて打て行程に其勢五百余騎有けるが

ガラス使用

控へこゝに落留りて鳥羽の南の門出
るにぞ其勢纔に二十七騎になりにけり。
樋口の次郎今日既に都へ入ルと聞へしかば黨
も高家も七條朱雀作り道四塚はよに馳
向ふ樋口が手に茅野の太郎光廣と云も
のあり四塚に幾等も有ける敵の中へ蒐入。

鐙蹈張立上りで大音声をあげて此中
に甲斐の一條の次郎殿の御手の人やまし
ますと問に一條の次郎が手でるいは軍さ
をぞせぬかとてどつと笑ふ笑はれて名謁
けるは斯申者は信濃の國諏訪の上の
宮の住人茅野の大夫光家が子に茅野の

太郎光廣と云者なりけり必一條の次郎殿の
御手の人を尋るにもあらず弟の七郎
其れにあり子共二人信濃の国に置ひた
るがあはれ我が父はよふてや死んだ
るらん悪ふてや死んたるらんと歎かんず
るところに弟の七郎か前で討死して子

共に慥に聞せんと思ふためなり敵をば
嫌ふまじとてあれに馳合ひ是に馳合ひ
射庭に敵三騎切て落し四人に當る敵に逢
て押双べてむずと組でどうど落ち差違へ
てぞ死にける白樋口の次郎は児玉黨にむ
すぼほれたりければ児玉の人とも寄合

ガラス使用

猛く弓矢取りの我きしも人も廣い中へ
入ると云ふは自然の时一先への息おとし
休ぎ志ばしの命をも生らど思てめるう
尓ぎ樋口が我等子纏綣（ムスボレ）なんも左こそ
有らめ今度れ勲功の賞に申替へ
て命計を助んとて樋口が許へ使者を
立て木曽殿乃御内に今井樋口楯根井と
き聞へさも給ひて候へども木曽殿討れ
させ給ひ候ぬ今井殿も御自害候上は何
かくるしふ候べき我等が中へ降人に参り
まへしこなの勲功の賞に申替て御命計
りをば助奉らんと云送りければ

ガラス使用

樋口の次郎ぞ聞ゆる兵なれども運や
尽にけん瞭々と兒玉黨の中へ降人
にこそ成にけるが大将軍九郎御曹司に
此由を申て法皇へ伺ひ申被たりけるが
ば院中の公卿殿上人局の女房達こそ申る
は木曽が法住寺殿へよせて御所に火を
かけ多くの高僧貴僧をほろぼし失ひし
には又ぞあそこにも爰にも今井樋
口と云声耳にぞ有しが是等をきらけ
られんずるは口惜かるべしと口々に
申被たりければ叶はずして又死罪
にぞ定られける同廿二日新摂政

ガラス使用

廢とめらまさせ給ひて本の摂政還著
し給ふ纔六十日の内に止められさせ
給ぬれば、いまだ果ぬ夢の如し。
昔粟田の関白は悦申しの後、
只七日だに有しかど、是は六十
日とはいへども、其間に節会も除

目も行はれしかば、思ひ出なきにはあらずや。
同二十四日、木曾左馬頭、餘黨五人が頸、
都へ入て、大路を渡さる。樋口の次郎も
降人まゐりしが、頻に頸の供せんと申す
まじければ、さらばとて藍摺の直垂、立
烏帽子にてぞ渡されける。同二十五日、

樋口の次郎終にきられにけり大将
軍範頼義経様々に申されけれ
ども今井樋口楯根井とて木曽が四天
のその一人なれは是等を助られん
は養虎の患あるへしと殊に沙汰
あつて斬られけるとぞ聞えし

傳へきく虎狼の国衰て諸侯はち
のごとくに起りし時沛公先きに咸陽宮
へ入るといへども項羽が後に来らん事を
恐て妻は美人をも犯さず金銀珠
玉をも掠めずいたづらに函谷の関を守
て漸くに敵を亡して天下の治まる

ガラス使用

中をばさやしぎにましまし今の木曾左馬
の頭どまで都へ入るといへども義経の
義経の命に順がはましかば彼流石が
謀ことにおとゞざらましさる程
に平家は去年の冬の頃より讃岐国
屋島の磯を出て摂津の国難波潟
に押渡て福原の旧里に居住して西
は一の谷を城郭に構ゑんがしは
生田の森を大手の木戸口とぞ定
めける其内福原兵庫板宿須磨に籠
る勢山陽道八ヶ国南海道六ヶ国都合
十四ヶ国を討従へて召さるゝ所の

軍兵い多るど十萬余騎とぞ聞えし。
一の谷ハ北ハ山、南ハ海、口ハせばく
て、おくひろし。岸たかくして屏風
を立てたるにことならず。北の山際より
南の海の遠浅まで大石を重ね上げ大
木を伐て逆も木に引、深き所にハ

大船どもをそばたてて、掻楯にかき、城の面
の高櫓にハ一人当千と聞ゆる四国鎮西
の兵ども甲冑弓箭を帯して雲霞のご
とくに並居たり。櫓の前にハ鞍置馬
ども十重二十重に引立たり。常に太鼓
を打て乱声をす。一張の弓の勢ハ、

ガラス使用

半月胸の前にかゝれば三尺の剣の光
かゝやき秋の霜腰の間に横たへたり
高き所には赤旗多く打立たれば
春風に吹かれて天にひるがへるが、さながら火ゑ
んの燃上るに異ならず

六箇度合戦

口説

平家福原ヘ渡リ給テ後ハ四国ノ
者𪜈一向従ヒタテマツラズ中ニモ阿波
讃岐ノ在廰等皆平家ヲ背テ源氏
ニ心ヲ通ハシケルガ流石昨日今日迄平
家ニ従付奉タル者ノ今日始テ源

氏ヘ参リタレ𪜈実（マコト）共ヨモ思給ハズ平家
ニ矢一ツ射懸テソレヲ効ニシテ参ント
テ門脇ノ平中納言教盛越前ノ三位
通盛能登守教経父子三人備前
ノ国下（シモ）津井ニ在（マシマス）ト聞イテ兵船十余艘
テゾヨセタリケル能登殿此由ヲ聞キ

給ヒテ源氏昨日今日迄我等ガ馬ノ草
剪（キツ）タル黨（ヤツ）原ガ卒（タチマチ）ニ契リヲ変スルニコソ有
ナレ其儀ナラバ一人モ洩サズ討テヤトテ
小舟𪜈押浮ベテ追ハレケレバ四国ノ者共
人目計ニ矢一ツ射テ去（ノカ）ントコソ思シニ能
登殿ニ手痛フ攻ラレ奉ツテ叶ハジトヤ

ガラス使用

思ケン遠慮ケニシテ引退キ淡路ノ国
福良ノ泊リニ付ニケリ其ハ国ニ源氏二人在リ
ト聞エケリ故六條判官為義ガ末ノ子
賀茂ノ冠者義嗣淡路ノ冠者義久ト
聞エシヲ大将ニ頼ウデ城郭ヲ構ヘテ待取
ニ能登殿押寄テ散々ニ攻給ヘハ加茂ノ

冠者討死ス淡路ノ冠者ハ痛手負テ虜
ニコソセラレケレ残留ツテ防矢射ケル兵ドモ百（家の子郎等）
三十余人ガ頸斬リ懸ツサセ討手ノ交名（ケウメウ）
記イテ福原ヘコソ進ラセラレケレソレヨリ門（白）
脇殿ハ一ノ谷ヘソ参ラレケル子息達ハ
伊豫ノ河野ノ四郎ガ召セ共参ラヌヲ責

ガラス使用

シトテ四国ヘゾ渡ラレケル兄越前ノ三位
通盛ノ卿ハ阿波ノ国花園ノ城ニゾ着給
フ弟能登ノ守教経ハ讃岐ノ屋島ニ着給
フ由聞エシカハ伊豫ノ国ノ住人河野ノ四
郎ハ安藝ノ国ノ住人沼田ノ次郎ハ母方
ノ伯父也ケレハ一ツニ成ントテ安藝ノ国ヘ

押渡ル能登殿此由ヲ聞給テ屋島ノ礒
ヨリ出テ追ハレケレバ其日ハ備後ノ国蓑ノ
島ニ著テ次ノ日沼田ノ城ヘゾ寄ラレケ
拾
ル沼田ノ次郎河野ノ四郎一ツニ成テ城郭
ヲ構ヘテ待所ニ能登殿押寄セテ散
々ニ責給ヘハ沼田ノ次郎叶ハジトヤ思ケ

ガラス使用

シ甲ヲ脱キ弓ノ弦ヲ迦（ハヅイ）テ降人ニ参ル河
野ハ猶ニモ順ハズ其勢五百余騎有ケ
ルガ五十騎計ニ討ナサレ城ヲ出テノガ洛
行所ニ（差二）能登殿ノ侍ニ平八兵衛為負
ト云者有二百騎計ガ勢ノ中ニ取籠テ
（細方ふかゝりて）
レテ主徒七騎ニ討ナサレ助ケ舟ニ乗ント

テ汀ノ方ヘ落行所ヲ平八兵衛ガ子息
讃岐ノ七郎義範究竟ノ弓ノ上手成ケ
レバ追懸リ七騎ヲ五騎射落ス唯主従
二騎ニ成テ落行所ヲ讃岐ノ七郎鞭
鐙ヲ合セテ追付河野ガ身ニ替ヘテ思
ヒケル郎等ニ押雙ヘ無寸ト組テ鐃（ドウ）ト落

ガラス使用

取テ押エテ頸ヲ掻ント為（スル）所ヲ河野ノ四
郎取テ返シ我郎等ノ上ナル讃岐ノ
七郎ガ頸掻切テ深田ヘ投ゲ入レ大音声
ヲ揚テ甲声伊豫ノ国ノ住人河野ノ四郎越（ヲ）
智ノ通信生年二十一軍ヲハ斯コソスレ
ロ我レト思ハン人々ハ寄ッテ留（トメ）ヨヤト云掛

名謁（ナノリ）捨テ郎等ヲ肩ニ引懸小舟ニ乗リ
伊豫ノ国ヘゾ渡リケル白文淡路ノ国ノ住
人安摩（アマ）ノ六郎忠景ハ平家ニ怏カラサ
リケルガ大船二艘ニ兵粮米ツミ物ノ具
入レ馬共立サセ都ヲ指テ上リケルヲ能
登殿此由ヲ聞給ヒテ小舟トモ押浮ヘ

テ追ハレケレハ西ノ宮ノ沖ニテ返合テ防キ戦
フ安摩ノ六郎能登殿ニ手痛ク攻ラレ参
テヘツリ手叶ハジトヤ思ケン遠ク屓スケニメ引
退キ和泉ノ国吹飯（フケイ）ノ浦ニ著ニケリ又紀
伊ノ国ノ住人園（ジ）辺（ベ）ノ兵衛忠康是モ
平家ニ怏カラザリケルガ安摩ノ六郎能

登殿ニ手痛攻ラレ奉テ和泉ノ吹飯ニ
在ト聞テ其勢百騎計。（テ）和泉国ヘ打
越ヘ安摩ノ六郎園辺ノ兵衛一ツニ成（ツ）テ
城郭ヲ構ヘテ待所ニ能登殿押寄テ
散々ニ攻給ヘバ安摩ノ六郎園辺ノ兵
衛叶ハジトヤ思ケン自（ミヅカラ）ハ逃テ京ヘ上ル残

ガラス使用

リ留ツテ防キ矢射ケル兵共家ノ子郎
等二百三十余人ガ頸截ツテ一ノ谷ヘゾ進
ラセラル又（拾）豊後ノ国ノ住人臼杵（ウスキ）ノ次郎
惟隆（タカ）緒方ノ三郎惟義伊豫ノ国ノ住
人河野ノ四郎一ツニ成テ都合其勢二千
余人備前ノ国ヘ押渡リ今木ガ城ニ

楯籠ル能登殿福原ニテ此由ヲ聞給ヒ
テ（安カラス古又セトテ）其勢三千余騎ニテ備前ノ国ヘ馳下
リ今木ガ城ヲ責給フ能登殿奴（キヤツ）バラハ
強（コハイ）御ン敵ニテ候テ勢ヲ給ルベキ由申
サレタリケレハ福原ヨリ數万騎ノ軍兵
ヲ指向ラル由聞エシカハ城ノ内ノ兵共手

ノ際戦ヒ人々捕高ノ名為究メニ人敵ハ大勢
也御方ハ小勢也ケレハ叶ハ不トヤ思ケン爰
ヲハ落テ暫シノ息ヲ続ケヤトテ臼杵ノ次
郎惟隆緒方ノ三郎惟義ハ豊後国ヘ
押渡リ河野ハ伊豫ヘゾ渡リケル能登
殿今ハ責ベキ敵ナシトテ一ノ谷ヘゾ参
ラレケル大臣殿以下ノ月卿雲客寄
合給テ能登殿ノ毎度ノ高名ヲゾ
感シ合ハレケル

三草勢汰

口説
同キ廿九日大将軍範頼義経院参
シテ平家追討ノ院宣ヲ兼ツテ西国へ

ガラス使用

発向スベキ由ヲ奏聞ス本朝ニハ神代ヨ
リ傳ハレル御寶三ツ有神璽宝劔内侍
所是也叓故ナウ遂テシカハ都ヘ返入タ
テマツルベキ由詔下サル両人庭上ニ畏
義ツテ退出ツ二月四日ノ日福原ニテハ故
入道相国ノ忌日トテ佛事形ノ如ク遂

行ハル（三重）朝夕ノ軍立チニ過行ク月日ハ知ラ子
ドモ去年ハ今年ニ廻リ来テ憂カリシ春ニモ
成ニケリ世ノ世ニテ有テシカバ如何ナル起立
塔婆ノ企テ供佛施僧ノ営モ有ルベカリ
シカ共唯男女ノ君達ハ指集テ歎悲合
ハレケリ福原ニハ此次デニ除目行ハレテ

僧モ俗モ皆司（ツカサ）成サレケリ中ニモ門脇ノ
平中納言教盛ノ卿ヲバ正ニ位ノ太納言
ニ上リ給フベキ由大臣殿ノ許ヨリ宣遣サ
レタリケレバ教盛ノ卿ノ返事ニ
今日迄モ有レバ有カノ我身カハ夢ノ中ニ
モ夢ヲミルカナト御返事申サセ給

ヒテ終ニ成セ給ハズ太外記師直ガ
子周防ノ介師繩（スミ）太外記ニナル兵部
ハ少輔正明ヲ五位ノ藏人ニ成サレテ藏
人ノ少輔トゾ召サレケル昔將門ガ東八
ケ国ヲ討從ヘテ下総ノ国相馬ノ郡ニ都
ヲ立テ我身ヲ平親王ト称ジテ百官ヲ

ナシタリシニハ暦ノ博士ゾ無リケル是ハツ
レニハ似ルベカラズ主上旧都ヲコソ出サセ
給フトイヘ𪜈三種ノ神器ヲ帯シテ渡ラ
セ給ヘハ叙位除目行レシモ僻事ニハ非ス
ヤ平氏已テニ福原迄攻上タル由聞エシカ
ハ故郷ニ残リ留マラレタリケル人々皆勇

悦合ハサレケリ中ニモ二位ノ僧都専親ハ
梶井ノ宮ノ年来ノ御同宿ニテ坐ケレハ
風ノ便リニモ申サレケリ宮ヨリモ亦御文ア
リ旅ノ空ノ粧ヒイカ計リ心苦シケレ𪜈都
モイマダ静マラズナド細々ト遊ハヒテ奥
ニハ一首ノ歌ゾ有ケル

人知レズ其方ヲ忍フ心ヲハ傾ク月ニ比
グヘテゾヤル

僧都是ヲ顔ニ押當テ悲ミノ涙ニ咽メ塞
敢給ハズ尒程ニ小松ノ三位ノ中将惟盛ノ
卿ハ年比ノ日重ナルニ随テ故郷ニ留置
給シ北ノ方少キ人々ノ事ヲ耳數キ悲
給ヒケリ高人ノ便リニ文ナンドノ通フニモ北
ノ方ノ都ノ御住居心苦シウ聞給テ尒
ハ是ヘ迎ヘ進ラセテ一所デ如何ニモ成ハヤ
トハ思ハレケレ共我身コソ有ラメ人ノ
為労テナンド思召沉デ明シ暮シ給
フニゾ責テノ御志ノ深サノ程モ顕レ二[illegible]

ガラス使用

ケリ二月四日ノ日源氏已テニ福原ヲ
攻ヘカリシカ共故入道相国ノ忌日ト聞
テ佛事遂サセンガ為ニ其日ハ寄ス五
日ハ西塞リ六日ハ道虚日七日ノ日ノ卯ノ
刻ニ一ノ谷ノ東西ノ木戸口ニテ源平ノ
矢合セトゾ定メケル尓ナカラモ四日ハ吉日

ナレハトテ大手搦手ノ軍兵ハ二手ニ分ツテ
攻下ル大手ノ大将軍ニハ蒲ノ御曹司
範頼相伴フ人々武田ノ太郎信義加
賀美ノ次郎遠光同キ小次郎長清山
名ノ次郎教義同三郎義行侍大将
ハ梶原平三景時嫡子ノ源太景季次

ガラス使用

一本長
中作

男平次景高同キ三郎景家稲毛ノ三
郎重成榛谷ノ四郎重朝同五郎重行
小山ノ小四郎朝政同キ長沼ノ五郎宗
政結城ノ七郎朝光左貫ノ四郎大夫廣
綱小野寺ノ禅師太郎道綱曽我ノ太
郎資信中村ノ太郎時経江戸ノ四郎重
春大河戸ノ太郎廣行玉ノ井ノ四郎資景
莊ノ三郎忠家同キ四郎高家小代ノ八
郎行平久下ノ次郎重光河原太郎高
直同キ次郎盛直藤田ノ三郎大夫行
安ヲ先トシテ都合其勢五萬余騎
二月四日ノ日ノ辰ノ一點ニ都ヲ立テ其日

ノ申酉ノ刻ニハ摂津ノ国昆陽野ニ陣
ヲゾ取タリケル搦手ノ大将軍ニハ九郎
御曹司義経同ク伴フ人々ハ安田ノ
三郎義貞大内ノ太郎惟義村上ノ
判官代安国田代ノ冠者信綱侍大
将ニハ土肥ノ次郎実平子息ノ彌太郎

遠平三浦ノ介義澄子息ノ平六義村
畠山ノ荘司次郎重忠同キ長野ノ三
郎重清佐原ノ十郎義連和田ノ小太
郎義盛次郎義茂三郎宗実佐々木
四郎高綱同五郎義清熊谷ノ次郎
直実子息ノ小次郎直家平山ノ武

者所季重天野ノ次郎直經小河ノ
次郎資能原ノ三郎清益渡柳ノ彌
五郎清忠別府ノ小太郎清重金子ノ
十郎家忠同キ与一親範多々羅ノ
五郎義春其ノ子ノ太郎光義源八廣綱
片岡ノ太郎經春伊勢ノ三郎義盛奥
州ノ佐藤三郎嗣信同四郎忠信江田ノ
源三熊井太郎武蔵坊辨慶ヲ先トシ
テ都合其勢一万余騎同日ノ同時ニ都
ヲ立テ丹波路ニ懸リ二日路ヲ一日ニ打テ
丹波ト播磨ノ境ナル三草ノ山ノ東ノ山
口小野原ニコソ著給ヘ

ガラス使用

三草合戦

口説 平家ノ方ノ太将軍ニハ小松ノ新三位ノ中将資盛同キ少将有盛丹後ノ侍従忠房備中ノ守師盛侍大将ニハ伊賀ノ平内兵衛清家江見ノ次郎盛方ヲ先トシテ都合其勢三千余騎三草ノ

ガラス使用

山ノ西ノ山口ニ押寄テ陣ヲ取ル其ハ夜ノ
戌ノ剋計大将軍九郎御曹司義経
侍大将土肥ノ次郎実平ヲ召テ平家
ハ是ヨリ三里阻（ヘダ）テヽ三草ノ山ノ西ノ山口ニ
大勢ニテ扣タンナリ今夜討ニヤスヘキ又明
日ノ軍サカト宣ヘハ田代ノ冠者信綱進
出テ平家ノ勢ハ三千余騎御方ノ御ン
勢一萬余騎遥ノ利ニ候明日ノ軍ト延
サレ候ヒナハ平家ニ勢附候ナンズ夜討
好（ヨカ）ンヌト覚ヘ候ト申サレタリケレハ土肥ノ
次郎美（イシ）フモ申サセ給フ田代殿哉誰レ
モ斯（カウ）コソ申度ウ候ヘ然ラハ疾（トウ）寄サ

ガラス使用

セ給ヘト申ス兵𪜈暗サハ闇シイカヽセン
ト口々ニ申ス所ニ御曹司例ノ大松明
ハイカニト宣ヘバ土肥ノ次郎尓ル叓候ト
トテ小野原ノ在家ニ火ヲゾ懸ケタリケル是
ヲ始テ野ニモ山ニモ草ニモ木ニモ皆火
ヲ懸ケタレバ晝ニハ些ニモ劣ラズシテ三里

ノ山ヲゾ越エ行ケル此田代ノ冠者ト申ス
ハ父ハ伊豆ノ国ノ前ノ国司中納言為綱
ガ末葉也母ハ狩野ノ介茂光ガ娘ヲ思
テ設タリケルヲ母方ノ祖父ニ預テ弓矢
取ニハ仕立タシ也俗姓ヲ尋レバ後三条
ノ院ノ第三ノ王子輔仁ノ親王ニハ五代ノ

孫也。俗姓モヨキ故ヘ弓矢ヲ取テモ好
リケリ。平家ノ方ニハ其夜々討ニセンズル
ヲハ。夢ニモ知ラズ。軍ハ定テ明日ノ軍ニ
テゾ有ンズラン。軍ニモ睡度ハ大事ノ物
ゾ。能ウ寝テ軍セヨ者ドモトテ。先陣ハ自
用心シケレドモ。後陣ノ兵ドモハ。或ハ甲ヲ
枕ニシ。或ハ鎧ノ袖。箙ナドヲ枕トシテ。
前後モ知ラズゾ。臥シニケル。其夜ノ子
剋ニ。源氏一万余騎。三草ノ山ノ西ノ
山口ニ押寄テ。鬨ヲ咄トゾ作リケル。平
家ノ方ニハ餘リニ慞（アワテ）噪（サハイ）テ。弓取ル者ハ
矢ヲ知ラズ。矢取者ハ弓ヲ知ラズ。周章

ガラス使用

鞅掌ケルガ、馬ニ中ラレジトヤ思ケン、
眞中ヲ開ケテゾ通シケル。源氏ハ落
行平家ヲ彼ニ追懸爰ニ追ツ攻ツ散
々討ケレバ、矢庭ニ五百余人討レヌ。
手負者モ多カリケリ。平家ノ方ノ大将
軍、小松ノ新三位ノ中将資盛、同少将
有盛、丹後ノ侍従忠房ハ、三草ノ手ヲ
破ラレテ面目ナシト耶思ハレケン、播磨ノ
高砂ヨリ船ニ乗テ讃岐ノ屋島ヘ。
渡リ給ヒヌ。尒𪜈其中ニ備中ノ守師盛
計コソ何トシテカ漏サセ給ヒタリケ
ン、平内兵衛、江見ノ次郎ヲ召具シテ、

ガラス使用

一ノ谷ヘゾ寄ラレケル　一入

口訣

老馬

九

大臣殿安芸の右馬の助能行を使者にて一門の中へ宣遣されけるは九郎義経こそ三草の手を攻破つてすでに乱入候ふなれ山の手が大事で候へ各向はれ候へかしと宣遣されければ人々辞退申されけり。

大臣殿父は篭殿の許へも伏着とまうがたく

の事ふかく候はゞ今度も父の御命ばかりを申

はうぐわんの宣ひ遣されけるは鎌倉殿

のたまはく重ねて義経が大事に思召し（下中下）

はうぐわんぜんじ、瀬籠なりたんじの御はからひ（スキドリ）

足立（チ）の郷（ヨフ）かへてもらふ遣（アシ）されんとぞ。

向ひまじかんとはうぐわん、なほ重ねて勝つとも

はうぐわん我身なでとはうぐわん心（シン）かうしんの散（ダ）経

義つねの寄（マ）のびに一言おほせで進（マイ）らせはべらん。（怒下）

御（ン）めんあふるし申しけるにやかれ候ふはりけるぞ（アフ）

白（ロン）大臣殿御（オン）なほもすぐ越中の前（セン）司盛俊（ゼン）

一万余騎を差遣はして腰越に留められけるは。

ガラス使用

兄越前の三位通盛の卿を具して山の手を
ぞ固めらるゝ山の手ハ平家の城郭（カリ）
一の谷のうしろ鵯（ヒヨドリ）越の麓なり通盛の卿
能登殿の仮屋（カリ）へ北の方迎へ取て最後の
名残を惜まれけり能登殿大きにいかつて
此手ハ大事なる方とて教経向けられて候が実
に強かるべし唯今も上の山より源氏ざつと
落したらんにハ取る物も取敢ずまじたとひ
弓をバ張て持つたりとも矢を挟（ハゲ）ずんハ叶ひ
難し縦ひ矢をバ挟たりとも引かずハ猶悪し
かるべしまして左様に打解させ給ひ
てハ何の用にか立せ給ふべきと諫（イサメ）られて通

盛の御覚もこそ思はれけん。いそぎ馳しかへして
人々をば返し給ひけり。同じき日の暮程に源氏
昆陽野を立て漸々生田の森に攻め近づく
雀の松原御影の松昆陽野の方を見渡
せば源氏手々に陣を取て遠火を焼。更
行まゝに詠むれば山の端出る。月の如し。平
家も遠火焼やとて生田の森にも形の如
くぞ焼たりける。明行まゝに見渡せば晴
れる空の星の如し。昔し沢辺の蛍
と詠じ給ひけんも今こそ思ひ知られけれ
あるは源氏は彼に陣取て馬休めかし
爰に陣取て馬飼などしける程に急がず

近づくぞ平家の方には今や寄する今や寄す
るとひしめきあひ心もせざりけり同じき
六日の曙に大将軍九郎御曹司義経一万
余騎を二手に分けて土肥の次郎実平に
七千余騎をあひそへて播磨路より西の手へ
さし向らる我身は三千余騎にて一の谷の後

鵯越を落さんとて丹波路より搦手へぞ向
向はれけれ兵共是は聞ゆる悪所にて有
んなり同じう死ならば敵に逢てこそ死に
たけれ悪所に落て死なんずるこそ口惜しけれ
此山の案内者やあると問はるゝ所に御前に
武蔵の国の住人平山の武者所季重すゝみ

出て此山の案内能く知つて候と申しければ
御曹司和殿は東国そだちの者の今日始
て見る西国の山の案内者大きに誠しから
ず（恐トケ）と宣へバ季重かさねて申けるは（高声）御諚とも
覚えぬものかな吉野泊瀬の
花をバ歌人が知り（白）（口説）敵の籠ツたる
城のうしろの案内をバ剛の者が知ると申
ければ是又傍若無人とぞ聞えし（中下）
又同じき国の住人別府の小太郎清重進
み出でて父で候ひし義重法師が申し（中下）
候ひしハ山越の狩をもせよ又敵にも襲はれよ
深山に迷ひたらん時は老馬に手綱

ガラス使用

打かけて先に追立て行かならず道へ出べし

ぞとこそ教へ候ひしかと申ければ御曹司

優も申たる者かな雪は野原を埋めども

老たる馬ぞ道は知るといふためしありとて

白葦毛なる老馬に鏡鞍おき白轡はげ

手綱むすんで打かけ先に追立ていまだ知ら

ぬ深山へ入給ふ比は二月のはじめの事

なれば峯の雪村消て花かと見ゆる所も

あり谷の鶯音信て霞にまよふ所有

登れば白雲皓々として聳下れば青山

峨々として岸高し松の雪だに消やらで

苔の細道かすかなり嵐にたぐふ折々は梅

ガラス使用

花とも又疑はる東西に鞭を揚げ駒を早めて
行く程に山路に日暮れぬれば皆下り居て
陣を取る武蔵坊弁慶老翁を
一人具して参りたり御曹司あれは何者
ぞと宣へば老翁此山の猟師で候と申す
さては案内は知りたるらん有のままに申せと宣へば争でか

存知仕らで候べきと申す御曹司さては
らん是より平家の城郭一の谷へ落し
鵯越を落さんと思ふはいかにと宣へば努々
叶ひ候まじ三十丈の谷十五丈の
岩崎などと申すは人の通ふべき所
までも候はずまして御馬などは叶ふまじく

叶はせ給へしか共王城の内をも穿（ウガ）ても
孫籍とも極て遣せ給へ候ふともかれば御
曹司満（サテ）左様の所と國を通ふか國へ通ひ
候せらたまも勝に成りへハ草は深さに隠さ
んとて播磨の國と丹波へ越世間ずまと
歟ましも申候へハ當孔求（アサリ）食を食（ハマ）んとて出

丹波の國と播磨の印南（イナミ）義盛へ越候とて
之ハ州曹司招き馬場にてんかれ。國内
通ふ所とする通ひとて候ひ候はあるさうに
女頭て要門出せすと宣へハしかハ年光
てめたくはけ候はし候める所にてたまわる
候ひて鵜王丸とて生年十八歳にて被籠けるか

小冠者（セウクワンジャ）を御曹司よばる御曹司かたじけ
なくも元服せさせ、おのれが父をば鷲尾の庄
司武久といふ、是をば鷲尾の三郎
義久となのらせて、先手（サキ）せさせ、一の谷案
内者して、我具せられつきしが、平家亡ひ源氏の
世となりて後、鎌倉殿と仲違ひて、奥州で
討れ給ひし時、鷲尾の三郎義久と名乗
て一所で死にける兵なり

一二蒐　九

口説
六日の夜の夜半ばかりまでは、熊谷平山搦
手に候ひける。熊谷次郎直実、子息の小次郎をよう
でいひけるは、此手は悪所でおとさんずれば、誰

ガラス使用

えんとい事もあるまじひぞ誘(イザウ)れ土肥か承つて向ふ寄るが西の手へ寄せかゞ一の谷の真魁と云ければ小次郎然るべう候さらばやがて寄させ給へ申す熊谷はまことや平山も手に有ぞかし打込の軍好まぬ者也平山が様見て参れとて下(ゲ)人を遣す案の如とく平山は熊谷より先に出立て人をば知らず季重におゐては一引も引まじい物と引まじい物とて独言とぞし居たりける下人が馬を飼ふとて憎ひ馬の長食ひ哉とて打(ウチ)ければ平山さうなせそ其名残も今夜ばかりぞとて打立けり下人

走り帰つて急ぎ此よし告げたりければ

熊谷さればこそとて、やがて打出ける

熊谷は其日の装束には褐の直垂に赤威

の鎧着て紅の母衣を掛、権太栗毛といふ

聞ゆる名馬にぞ乗つたりける。小

次郎は沢瀉をひとしほ摺つたる直垂に

猪縄目の鎧着て、西楼と云ふ白驢毛なる馬にぞ乗

つたりける。旗指は麹塵の直垂に小桜を黄に

返いたる鎧着て、黄駱馬なる馬にぞ乗つたりける。

主従三騎打連、落さんずる谷をば弓手になし

馬手へ歩せ行程に、年来人も通はぬ田井

の細と云ふ古道を経て、一谷の浪打際へぞ打出

入説

去程ニ一ノ谷近ウ塩屋と云所まで未夜深かりけれバ。

土肥次郎実平七千余騎にて支へたり。熊谷

ハ夜に紛れて波打際よりそこをバ速(ツト)打通りて一の

谷の西れ木戸口にぞ押寄(セ)すれバ其時までも未夜(に)

深かりけれバ城の内ゟも静り返て音もせず。熊谷

子息の小次郎を呼フで云けるハ。我も我もと先(キ)心を

心挟ふ直実一人と思ふへからず。

下中下

懸る者どもも多かりけるまでに寄(セ)すれども夜

の明るを相待て此辺にも控へたるらん。我心挟ふ

直実一人と思ふへからず。誘(イザ)若(ナ)諸(ララ)どもか播磨の際

怒下

歩(セ)寄(セミ)鐙踏張立上り大音声を上て武蔵の

高声へ

国の住人熊谷ノ次郎直実。子息の小次郎直家。

一の谷の先陣ぞや。我名謁(ツ)する城の内ゟも走向(イ)て。

乃説

白

好々音勿為敵が馬の足疲らかさせよ。矢種射尽さ
せよとて控へたる所に、暫有ッて
後より武者こそ二騎続いたれ。誰そと問へば季重と
答ふ。問ハ誰そ直実ぞかし。如何に熊谷殿は何より
ぞ。宵よりぞとぞ答へける。季重も頓て続いて寄
べかりつるを、成田五郎に謀かられて、今まで
遅々したる也。成田が死なば一所で死なうと契りし
間、打連て寄せければ、痛ふ平山殿、先蒐早り
なし給ひそ。先蒐ると云ふは、味方の大勢を
後に置て先蒐たればこそ、高名不覚も
人に知らるれ。唯一騎大勢の中へ蒐入て討れた
らんは何の詮かあらんずると云間、実にもと思ひ、小坂のある

つゞく坂を下り様に馬の首を引立て御方の勢を
待所に成田も續いて出来り打並べて軍の様
とも云合せまほしげに思居たるに暫くためらひして
季重が方を寸気なげに見成して傍へ突と
通りければ哀此者は季重を謀りつゝ先蒐せんとするにこそ思
五六段計り進んだるを那が馬を我るより弱げ
なりと物をも目をも掛ず一鞭打て追付て正なしうこそ季
重程の者を謀り給ふ者哉こそと云懸て打捨て寄
つもバ今をも遠く下りやしんずと後影ばかり見
ならじとこそ我に語りけれ東雲漸明けれど熊谷
平山彼是五騎で押寄る熊谷先に名謁
つゞいて今平山が聞ぬ又名謁ごと思ひ合て撰稍の

ガラス使用

降へ歩ませ寄せ鐙踏張立上り大音声上て名のり
けるは武蔵の国の住人熊谷の次郎直実
子息の小次郎直家一の谷の先陣ぞやとぞ名乗つたる
城の内より是を聞ていざや夜もすがら名乗る熊谷
父子を提て来らんとて進む平家の侍誰々ぞ
越中の次郎兵衛盛嗣上総の五郎兵衛忠光悪七
兵衛景清後藤内定経是を始として究竟の侍二
十余騎城戸口を開て懸出たり平山は滋目
結の直垂に緋縅の鎧着て二つ引両の母衣を掛目
糟毛と云聞ゆる名馬にぞ乗たりける旗指は黒
革縅の鎧着て甲猪首に着成て寂鴾毛成
る馬にぞ乗たりける平山鐙踏張立上り大音声を

いかにて去る保元平治に先驅て高名せし

名譽なる武藏の國の住人平山の武者所季

重こそ名譽にて旗指と二騎喚いて驅ゝ熊谷かくれハ

平山續き平山かくれば熊谷續きて互に我劣じ

と入替へ\名乗り合ひの中にも揉にもんで火

出るまでぞ攻たりける平家の方の侍ども熊谷

平山に餘りに痛に驅られて叶ハじとや思

ひけん城の内へ颯と引て敵を外様に成て防

き戦ひける熊谷ハ乗つたりける馬の太腹射させて跳

ねれば足を越て下立たる子息の小次郎直家も

捨楯の際へ馬の鼻突かする程に寄て戦ひけるが

弓手のかいな射させ遂に射させて已に馬より下りて

父子（ヲヤコ）残てハ戦ひ立（ヅ）申しける。熊谷（コ）ハ小次郎ハよ
具すゐ居ほど、鎧（ヨロイ）築（ヅキ）常ゟせよ。裏（ウラ）掻かすな。常
に錣（シコロ）を傾ぶけよ。内甲射さすなと云て教（ヲシ）ゆれ（シヤ）
其後熊谷（コ）鎧ニ立（ヅ）する矢とも皆かなぐり捨（ステ）
城の内を睨まへ大音声を上て、去年（コゾ）の冬（フユ）鎌
倉を立（チ）しより以来、命をバ兵衛佐殿ニまつり。

殊ニハ一の谷ハ汀ゟさきかけんと思切（ツ）する直実也
かしこん室山水島二ヶ度の軍に打勝て高名
とありし者ハ誰ある。越中の次郎兵衛、上総の五郎
兵衛、悪七兵衛景清（キヨ）ハなきか。能登殿ハおはせぬ
か。かゝる名不覚も敵に依（ツ）てこそすれ。人毎にハ
得せじ。者共ハ熊谷父子（ヲヤコ）に落合や落合へ

組や組こぞて、匂たる越中次郎兵衛もひかへて、
其日装束なりけれど、紺村濃の直垂に緋威の
鎧着て、連銭葦毛成馬に金覆輪の鞍を
置て乗たりけるが、熊谷父子に目をかけて
歩せよる。熊谷父子も中を破られじと、交も
透さず立双で、太刀を額に當て、後へハ一引も
引ず、弥前へぞ進ける。越中次郎兵衛是を見て、
叶はじとや思けん、取て返けり。熊谷是を見て、いかに
越中次郎兵衛とこそ見れ、敵には何処を嫌
ふぞ。熊谷父子は落合落合、組や組こと
云けれ共、次郎兵衛左もさうずとて引返す。上
総五郎兵衛是を見て、きたなひ殿ばらの帰る

もし哉とて組まんとする若武者、落合ぬ事ハよしと
ならじとて既に慕ニこそ来りけれバ渋谷云来。
武蔵箕ケ鐘の神代相伝ふ君の御大事にもよ
過る迄からず有りつるとおもしろく制せられ及
ばぞ組ざりけり。其後熊谷、来り来つて喚
て叫ぶ平山と熊谷、父子が戦よかりしに馬乃
悪体ついて又鏑ぎり櫓の上の者ども射よや射
や射取とて、差攻引攻散々に射けれ共、敵ハ小
勢也けれハ御方の大勢に紛まして矢にも中らず。
熊谷平山ハ、落合や落合へ組や組と云けれ
ども、平家の方ハ馬かきて来々事もなげし領てハ
構へもなく舟より人々立ちて申されバ皆彫切る。

様也ければ熊谷平山が騎(ッ)たる馬どもは飼(カヒ)に飼たる
大(ダイ)の馬共なれば一當(アテ)あてゝバ皆蹴倒され
ぬべき間流石押並べて組武者一騎もなか
りけり。平山ハ身に代(カ)へて思ひける旗指
を討せて安からず思ひければ城の内へ蒐入(リ)
やて其敵が首取(ツ)てぞ出來(キ)ける。熊谷又子も
分捕餘多してありけり。熊谷ハ先(キ)に寄せたれ
ども城戸(キド)を開(ヒラ)かねば蒐入らず。平山ハ後(ノチ)に
寄(セ)たれども城戸を開(アケ)たりければ蒐入(ッ)ぬ。扨こそ
熊谷平山が一二の蒐をバ争ひけれ

二度懸

口説

去程に成田五郎も出来り土肥次郎実平
七千余騎色々の旗指上て喚叫て責戦ふ大
手生田の森をも源氏五万余騎にて堅メたり
ける勢の中に武蔵の国の住人河原太郎河原
次郎とて兄弟有河原太郎弟の次郎を
呼で云けるは大名は我と手を下さねども家
人の高名を以て名誉とす我等ハ自手を下サでハ
叶ひがたし敵を前におきなから矢一ツをだに射ず
して待居たれバ余りの心元なさに高直ハ城中へ
紛れ入て一矢射ンと思也汝ハ残り留て後の證人
に立と云けれバ弟の次郎涙をはら〳〵と流ゐて是

口惜しき事を宣ふ者哉只兄弟二人ある者が兄を
討せて弟が獨り残留たらばいく程の栄花
を盛へ保べき所々で討れんより一所でこそ
討死をもせんとて下人を呼寄せ妻子の許へ
最後の有様云遣し馬にも乗らず下駄
履弓杖突て生田の森の逆茂木を上り越て
城の中へぞ入にける星明りに鎧の色もさだかなら
す河原太郎大音声を上て武蔵の国の住人
河原太郎私市高直同く次郎盛直生田の
森の先陣ぞやと名乗ける城の中にも是を
聞て哀東国の武士程恐しかりける者は
なし此大勢の中へ只兄弟二人蒐入たりとも

ガラス使用

こそ何程の事か仕出すべき唯置て愛せよや
ど討ンと云者も無かりけり河原兄弟が究
竟の弓の上手なりければ差攻引攻散々に射る
城ノ中の者共是を見て今は此者共を悪しと討てや
と云程こそ有りけれ西国に聞へたる強弓精兵
より備中の国の住人真鍋四郎真鍋五郎

とて兄弟有り兄の四郎をば一ノ谷に置たりしと
弟の五郎をば生田の森に在りけるが是を見て
能引暫標と放つ河原太郎が鎧の胸板まで
後へ突と射抜かれて弓杖にすがつて蹲む所を弟
の次郎走り寄り兄をば肩に引懸て生田の森の
逆茂木を登り越こんとする所を真鍋が二の矢に

弟の次郎が草摺の迯を射させて同じ枕に伏にけり
まなべが下人落合て河原兄弟が頸
を取て大将軍新中納言知盛の卿の見参
に入たりければ哀剛の者や是等をこそ一人
當千の兵とも云べけれ惜き者共を助て
見でとぞ宣ひける其後河原が下人走り
散て河原殿兄弟城中へ真前懸て討れ
給ひぬるぞと呼はりければ梶原平三
景時これを聞て私の黨の黨の不覚で
こそ河原兄弟をば討せたれ時よく成ぬるぞ
寄よやとて鬨をどっと作りければやがて
大手五萬余騎も一同に鬨をぞ作りける

ガラス使用